

高等学校

大会主題：「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育学習の推進」

研究主題：「対話的な授業を通して生徒同士の協働を図り深い学びに結びつく授業を目指して」

I 研究の概要

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題

平成30年に高等学校学習指導要領が公示され、高等学校保健体育科の目標が、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成することを目指すことと定められた。目標の冒頭に掲げられている「体育の見方・考え方」とは、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しみや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」として示されている。

そのため学校では、生徒の運動に対する経験・能力・関心等の多様化を踏まえ、生徒の実情に応じた自ら運動に親しむ能力を高めるとともに、運動を日常生活の中に積極的に取り入れるように働きかけ、高等学校卒業後に少なくとも一つの運動を継続することができるような資質・能力を育成することが重要と考えた。

本校の生徒は体育授業に対して積極的・主体的に取り組む生徒が多く、学習指導要領の改訂の趣旨を達成していると考えられる。しかし、教師が一方的に指示したとおりに実践することには長けているが、自ら考えたり生徒同士で教え合ったりする事に課題があり、深い学びにつながっていないと感じられる。このことから本主題を設定した。

(2) 本校の教育方針から

全職員協働による、厳しくも温かい教育活動を推進し、社会で求められる資質・能力（幕総アビリティ）を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手となる「知」・「徳」・「体」において調和の取れた生徒を育成する。

① 確かな学力の養成

全教員が更なる授業力の向上のために具体的な方策を講じ、実行する。

その上で「学力の3要素」を培い、生徒が個性や才能を最大限に発揮し、自己の変容や成長の自己評価をすることによって、知的向上心の旺盛な生徒の育成に当たる。

② 豊かな心の育成

自己を見つめ、他を互いに認め合い、豊かな心を身につけるとともに、グローバルな視点で未来を切り拓く高い志を持つことができる生徒の育成に当たる。

③ 健やかな体の体得

生徒一人一人が幸福な人生を自ら創り出していくために、よりよい生活や人間関係を形成することができる心身ともに健やかな状態を体得、維持できる生徒を育成

する。

生徒が在学中に培う資質・能力（幕総アビリティ）は以下のとおりである。

ア 社会的適応力……自分を取り巻く多様な社会をグローバルな視点で正しく理解し適応する力

イ 自己分析力……自分の能力や生活を客観的に評価する力

ウ 発信力……自分の目指す将来像や実現に向けて、必要な能力を明確化させる力

エ 主体的実行力……自らの能力を向上させるため、具体的かつ主体的な行動をする力

オ 継続力……困難な状況に対し、柔軟な対処ができ、ポジティブな行動を継続させる力

この方針の「②豊かな心の育成」及び「③健やかな体の体得」をバックボーンとして本研究に取り組んでいく。

2 主体的・対話的で深い学びについて

（1）主体的・対話的で深い学びの実現

①主体的学び

運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それを考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりする学びの過程と捉えられる。各種の運動の特性や魅力に触れたり、自他の健康の保持増進や回復を目指したりするための主体的な学習を重視する。

②対話的な学び

運動や健康についての課題の解決に向けて、生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深めていく学びの過程と捉えられる。自他の運動や健康についての課題の解決を通して、協働的な学習を重視する。

③深い学び

自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けた試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学びの過程と捉えられる。生徒の発達の段階に応じて、これらの深い学びの過程を繰り返すことにより、保健体育科の「見方・考え方」を働かせることを重視するものである。

④体育の見方・考え方

生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上を果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連づけること」であると考えられる。

（2）具体的な方法

①指導方法を工夫して必要な知識及び技能の習得を図る。

②生徒たちの思考を深めるために発言を促す。

③気づいていない視点を提示する。

④学びに必要な指導の在り方を追求する。

⑤必要な学習環境を積極的に設定していく。

(3) 具体的な生徒の姿

①主体的な学び

ア 運動の特性を味わっている。

イ 課題を選んだり自分で考えたりして運動に取り組んでいる。

ウ 「もっと速くなりたい」「もっと滑らかに演技したい」という声上がる。

エ 学習を振り返り、課題を修正したり新しい課題を設定したりしながら運動に取り組んでいる。

オ 「こうやったらできるのではないか」と予想を立て、運動に取り組んでいる。

②対話的な学び

ア 息を合わせて運動している。

イ 励まし合う、ほめ合う。

ウ 共感を前提にしながら、自分の考えをより確かなものにするために、相手の考えを受け入れている。

エ 友だちの考えを引き出している。

オ グループやペアで互いの課題を共有し、試行錯誤を繰り返している。

③深い学び

ア 自己の能力に応じた課題を選んでいる。

イ 「よりよくしたい」と追求している。

ウ 自分で変容を感じられる「私は〇〇ができるようになった」。

エ 自分の変容を振り返って言語化できる。

オ 「時間が経つのが早い」と感じている。

カ できるようになるためのポイントを言語化できる。

キ 他の運動種目で身に付けた技能や行い方を活用している。

3 研究の目的

(1) 生徒が主体的に授業へ参加できるようにするため、対話や協働を取り入れた授業展開を通して明らかにする。

(2) 教師の働きかけよりも、生徒が主体的に記録向上方法を考える授業を行う方が深い学びにつながることを明らかにする。

4 研究の仮説

仮説1 班を固定することで生徒相互の理解が深まり、積極的な対話活動が行われ、深い学びにつながるであろう。

仮説2 教師の指示による授業を展開するよりも、生徒の対話活動を通じて考えさせた場合の方が深い学びにつながる授業が展開できるであろう。

5 研究の方法

この研究紀要作成に際して、本校保健体育科職員17名でこの研究大会の意義を共有するとともに、新学習指導要領が目指す「主体的で対話的な深い学びを目指す授業改善」について研鑽を深めた。各自がこれまでの授業実践を振り返り、問題点をあげ改善する方法を検討する研修会を3月から5回実施した。この研修会を重ねるごとに授業改善に役立ち、生徒の深い学びに結びついていくことが明らかになっていった。また、本校保健体育科職員の「深い学びの観点」を全員で共有することができ、何を授業で実践すればいいのか明らかになった。

＜本校保健体育職員が共有している深い学びの観点＞

- (1) 自分の苦手な種目や初めて取り組む種目に対して技術の習得に取り組み、「できそうな気になりチャレンジ」しようとしている。
- (2) 「あと1回」「もう1回」など自分の技能向上のために探究しながら取り組もうとしている。
- (3) 自己の体力や能力、運動経験などを客観的に把握し、自分の取り組むべき課題を見つけようとしている。
- (4) パフォーマンスを「言語化」し、生徒同士で情報を活用し、動きのポイントを共有しようとしている。
- (5) 習得した知識等を活用し、生徒同士ポジティブな声掛けを行い、自分だけでなく集団として能力向上に取り組もうとしている。

本校の生徒は体育の授業に対して積極的に取り組む生徒が多く、正確に状況を把握できないと判断したため質問紙調査法は補完的に行い、観察法を主たる方法とした。多くの授業が、1講座の人数が50名以上と多く、複数教員で授業を担当していることから、主教員(T1)が授業を進め、副教員(T2)が観察を行った。深い学びの観点について、授業を通して達成できているかをT2が観察することで仮説を検証していく。

質問紙調査は、仮説1を明らかにするために、問1:「班を固定した方がいいか、固定しない方がいいか」という観点と、仮説2を明らかにするために、問2:「授業中モチベーションが上がるのは誰からのどのような言動か」という観点で実施した。この調査は、陸上競技の講座のみ、1年男子85名、2年女子61名合計146名を対象として実施した。

仮説1について

質問紙調査と授業内の観察から、班を固定したグループと、固定しないグループの深い学びの観点を比較して、生徒同士の対話活動を促し、深い学びにつながる授業のあり方を明らかにしていく。

仮説2について

質問紙調査と授業内の観察から、教師からの指示よりも、生徒同士の指示や声掛け、アドバイスが積極的に行えている授業は、深い学びにつながることを、深い学びの観点を比較して、明らかにしていく。

Ⅱ 研究の実際

1 観察法による深い学びの達成状況

表1 観察法による深い学びの達成状況（複数回答）

深い学びの観点	1年男子 85名		2年女子 61名		合計 146名	
	人数 (名)	(%)	人数 (名)	(%)	人数 (名)	(%)
①自分の苦手な種目や初めて取り組む種目に対して技術の習得に取り組み、「できそうな気になりチャレンジ」しようとしている。	74	87.1 %	52	85.2 %	126	86.3 %
②「あと1回」「もう1回」など自分の技能向上のために探究しながら取り組もうとしている。	76	89.4 %	55	90.2 %	131	89.7 %
③自己の体力や能力、運動経験などを客観的に把握し、自分の取り組むべき課題を見つけようとしている。	71	83.5 %	49	80.3 %	120	82.2 %
④パフォーマンスを「言語化」し、生徒同士で情報を活用し、動きのポイントを共有しようとしている。	55	64.7 %	42	68.9 %	97	66.4 %
⑤習得した知識等を活用し、生徒同士ポジティブな声掛けを行い、自分だけでなく集団として能力向上に取り組もうとしている。	75	88.2 %	52	85.2 %	127	87.0 %

表1から分かる通り、②主体的な取組については89.7%⑤集団の向上に励む87.0%①チャレンジする気持ち86.3%③自己の課題を客観的に捉え、課題を見つけようとする82.2%の4項目で高い達成状況を示している。④の言語化やポイントの共有は66.4%と低い状況である。

また、観察法による深い学びの達成状況は1年男子、2年女子など集団の属性による差が見られない。

本校ではこの結果から体育の授業に関して深い学びに結び付きやすい取組をしている生徒が多くいることが分かった。

2 授業内の観察

(1) 陸上競技の授業

①1年男子6講座、2年女子6講座を週に1時間、通年で実施している。

②前期種目：短距離走（50m走、加速50m走、100m走、ペースランニング走（100m走のタイム+2秒）、リレー）

③後期種目：砲丸投げ、走り高跳び、長距離走

④班の固定：記録測定前までの準備運動、補強運動、技術練習までは集合隊形の列ごとで行うが、タイムを測定する時は相手を固定する場合と固定しない場合がある。本研究での班を固定するとは同じ相手とタイムトライアルを行うということである。

表2から班を固定した場合がいいと回答した人数と固定しない方がいいと回答した人数に差がなく、生徒の意識として授業への取組に大きな差がないことが見られた。表3からも班を固定するしないで深い学びの達成状況に有意な差がみられないことが判明した。このことは生徒個人の価値観に左右されやすく、授業における主体的・対話的な深い学びの要因にならないことが明らかになった。つまり、陸上競技の授業において、タイムトライアルのメンバーを固定することでは、仮説1について証明することができなかった。

表2 問1：授業内の班を固定したほうがいいか、固定しない方がいいか。

	固定した方がいい 名(%)	固定しない方がいい 名(%)	未記入
人数	73名(50.0%)	72名(49.9%)	1名(0.1%)
理由	タイム差を意識できる 41(56.2)	多くの人と関わられる 46(63.9)	
	お互いの変化を意識できる 18(24.7)	同タイムで競うことができる 15(20.8)	
	走る感覚がずれる 5(6.8)	自分のタイミングで 5(6.9)	
	時間がかかる 4(5.5)	自分で行動するのが主体的である 3(4.2)	
	スタートが一定にできる 4(5.5)	記録に集中できる 2(2.8)	
	その他 1(1.4)	その他 1(1.4)	

表3 班を固定するしないで深い学びの達成状況

班固定	深い学び	①	②	③	④	⑤
する	人数(名)	62	67	59	47	64
	(%)	49.2%	51.1%	49.2%	48.5%	50.4%
しない	人数(名)	64	64	61	50	63
	(%)	50.8%	48.9%	50.8%	51.5%	49.6%
合計		126	131	120	97	127

本校の多くの授業はクラス単位の編成ではなく、個々の生徒が自分の進路に合わせた講座編成となっているため、毎時間違うメンバー構成で授業を行っている。従って、人間関係は他校と比べて希薄である。そのため、1週間に1回であるが班を固定し人間関係を構築することにより、生徒同士の対話を生み出し主体的に授業に取り組むようになるであろうと考え仮説を設定したものの、班を固定する又はしないということの、深い学びへの影響については、明らかにすることができなかった。仮説設定においては、班を固定した方がお互いの性格だけでなく運動歴や身体的な特徴を把握できるので、的確なアドバイスを

送ることができるのではないかと考えたが、そのような現象を陸上競技の班を固定した活動内容の授業では導くことができなかった。

この結果を受けて、マット運動、ダンスの授業ではどのような状況であるかを調査し研究した。マット運動及びダンスに関しては、観察法と生徒の感想から班を固定する場合と固定しない場合の差異を明らかにしていく。

(2) マット運動の授業

① 生徒の実態

2年男子297名を対象として授業を実施した。ほぼ全ての生徒が小学校、中学校時にマット運動を経験しているものの、各講座でマット運動が「好き」または「得意」と答えた生徒は1割程度であり、マット運動に対しての意欲が低い生徒が大半である。

② 授業展開方法及び工夫点（授業展開において意識したこと）

ア 授業計画（6時間の練習と3時間の評価及び自主練習）

イ 各授業において必ず難易度の低い種目（誰でもチャレンジできる種目）を取り入れ、生徒の意欲を落とさないように場の設定を行う。

ウ グループは固定して行う。

エ 毎時間、グループごとに補助やアドバイス、相互練習の時間を確保する。

※種目のスタートは必ず見本を示し、ポイントを説明する。

危険を伴う種目については通常より時間をかけて、部分ごとに分けて説明する。

オ それぞれの種目において部分点を設定し、生徒の技能に合わせたチャレンジを可能とした。

③ 評価方法の工夫

ア 難易度の低い種目については、日頃一緒に練習しているグループ等での相互評価を行い、難易度の高い種目については教員による評価を行った。

イ それぞれの種目に部分点を設け、生徒がチャレンジしやすいものを作成、更に向上心のある生徒、能力の高い生徒の意欲へも配慮した。

ウ 評価の時間を多く配分することで、生徒の再チャレンジを促進させた。

④ 授業を終えての生徒の感想

- ・自分ができなかったものが授業を重ねるごとにだんだんできるようになってきて、とても充実した授業となった。倒立はずっとできなかったけど、最後に挑戦してみて成功できてとてもうれしかった。倒立を教えてくれた友達に感謝したいです。
- ・自分はマット運動が苦手で、中学の時は逃げてきましたが、今回行ってみて怖かったけど、できた時はとても嬉しかったです。最初は倒立前転なんて無理だと思っていたけど、仲間が補助してくれたりして、できて良かったです。
- ・今までマット運動は苦手な種目だったが、友達と教え合い、練習したことで少しずつできるようになり、最初はあきらめていた技も成功させることができた。友達と助け合うことでとても楽しいマット運動になった。

- ・マット運動を通してあきらめないことの大切さを学びました。苦手だった技ができたときの達成感はとても凄かったです。また、グループの子たちとアドバイスし合いながら協力して技を成功させることができた時はとても嬉しかったです。
- ・自分ができない種目や他の人ができない種目を教え合って協力できた。人にコツを教えてもらうとすぐにできたりしたので、コミュニケーションを取ることが大事だと思った。もう少し練習して、難しい技にも挑戦したかった。

⑤この授業を通しての成果

ア 生徒が自己の課題に対して積極的にチャレンジする様子が多く見られ、授業の雰囲気（できない生徒がチャレンジしやすい環境）が非常に良かった。

イ 生徒の感想からも達成感や自己肯定感が多く感じられた。

ウ 授業初回から補助活動などのグループ活動を設定したことにより、授業後半まで互いに協力しながら授業を進めていくことができた。（協働の形成が容易であった。）

エ 何よりも、生徒たちができない技に積極的にチャレンジし、できるようになっていく様が何度も見られ教師の側も達成感を得られる「深い学び」を実感できた。

⑥班の固定の成果

マット運動の授業では④の生徒の感想から班の固定に肯定的な意見が多くみられた。



(3) ダンスの授業

ダンス授業（創作ダンス）は作品を創るという作業があるため、元々「思考」「対話」「協力」といった内容を十分持ち合わせている。ここでは改めて、より「主体的」「対話的」で「深い学び」に向かう授業を考えてみたい。

本校のダンス授業では後期（10時間）に各班で創作ダンスを作成するが、そのための手順や基本を学ぶ前期（10時間）の授業内容を以下に紹介する。

①指導計画

時間	内容	目的
1	オリエンテーション ダンスを踊れる体を作る（立ち姿勢、ストレッチ）	
2	班作り ダンスを踊れる体を作る（体の伸びと縮み）	音楽のイメージに合わせて動くことを学ぶ
3	ダンスを踊れる体を作る（走る、とぶ） 練習作品A「寝坊した朝」	イメージを体で表現することを学ぶ
4	練習作品B「カレー」	作品の構成（起承転結）を学ぶ 音楽の使い方を学ぶ
5	練習作品C「噴水」 ※シンメトリー、カノン、ユニゾンを入れて	フォーメーションの変化を学ぶ
6	前期発表作品づくり ①全体構成を考える	後期自由作品作成のための練習作品
7	前期発表作品づくり ②場面ごとの振り入れ	
8	前期発表作品づくり ③場面ごとの振り入れ	
9	前期発表作品づくり ④場あたり、踊り込み	
10	前期発表作品づくり ⑤発表	

②主体的、対話的な授業のために



▽班作り

クラス、男女等特に配慮せず機械的に分け、1年間固定する。誰とでも協力して作品づくりをしていくことが重要と考える。

本校の場合1講座に6クラスの生徒がいる。班分けをしたらまず自己紹介から始める。

▽約束事項

ア 人任せにせず、各自できることを必ず見つける。

※1つの課題に対し、必ず一人1回は意見を言う、あるいは動きを提示する。

イ スマートフォン等を有効（音楽をかける、動画を撮る等）に利用する。

ウ 授業での課題はその時間内にやり遂げる。

③創作ダンス作成のための課題と班の活動

ア 各課題は生徒のイメージがわきやすく、ダンスが創りやすい題材を提示する。

イ 各課題に対して創る時間を設定する。(詳細は④参照)

※本校の場合1～2分くらいの時間で即興的に創らせる。

ウ スマートフォン等を効果的(音楽をかける、動画を撮る等)に使わせる。

エ 演技をレポートにまとめ、構成を明確にさせる。

④練習作品ABCの授業(指導計画の2～5)について

各作品のポイントとなる課題を提示し「話し合いと振り入れ→全体で踊る→確認と修正→全体で踊る」を繰り返して作品を完成させていく

<提示する課題の例> ※1作品につき4～6個程度

A:「目覚まし時計が鳴り慌てて起きる」「駅の改札」「満員電車」「学校へ走り込む」等のイメージを提示し、寝坊して慌てている朝の様子を表現する。

B:「野菜を洗う」「材料を切る」「炒める」「煮込む」等作品の流れを提示し、カレーができていく様子表現する。

C: 隊形(直線、円、シンメトリー)やカノン、ユニゾン等を提示し、水の流れを考え噴水を表現する。



ア 1課題(8カウント×2～4程度の長さ)について各班で1～2分程度で話し合いをし振り入れしていく。

※与える時間は生徒の活動の様子によって決めるが長すぎると集中せず人任せにしやすい。



※「シンメトリー」の課題で振り入れしている様子。



※「カノン」の課題で振り入れしている様子。



イ 全体で踊ってみる。

※不十分なところがあっても一斉に踊ってみる。



ウ 「演技の確認と修正（1～2分）→全体で踊る」を2～3回繰り返し、課題を完成させていく。

エ 各課題を仕上げ、それをつなげて作品を完成させ、全体で踊ってみる。



※完成した動きを動画で確認している様子。

※課題を明確にすることにより、「演技の確認」「話合い」「振り入れの修正」といった生徒の主体的、対話的な活動が行われやすくなる。



オ 全体で通して踊ってみる。（2～3回）

お互いの作品の見せ合いもする。

⑤前期発表作品づくり

課題作品ABCを作る授業で、生徒同士意見を出し合い協力して作品を創る事を学んだ後、そのまとめとして前期発表の作品を創る。

これは後期各班での自由作品を作るための練習と位置付けしている。

練習作品のため、テーマ、音楽はこちらで用意し、ダンスの動き（カノン等）も一部指定する。

生徒は各班で課題作品ABCを作った手順を参考にして発表作品を創っていく。

▽発表作品のレポート例

<創作ダンス課題作品> 03 - 1 班

▽タイトル 水鳥の舞

▽音楽 水辺のワルツ

▽解説 水辺の雰囲気、その中で優雅に飛ぶ水鳥を表現する

▽課題

- ①いかにテーマを表現するか
- ②発表までの手順を覚える
 1. テーマと曲を決める
 2. 起承転結を考える
 3. 振り入れをする
 4. 通し込みと手直し
 5. 場当たり
 6. 発表

組	番	氏名	No		
			1		
			2		
			3		
			4		
			5		
			6		
			7		
			8		
			9		
			10		

▽構成

	起	承	転	結
タイム	0:00 ~ 8×2	0:19 ~ 8×2	0:38 ~ 8×4	1:17 ~ 2:00 8×4+8
音楽	前奏	水辺の雰囲気	ワルツ1	ワルツ2
ダンス	湖畔が現れる	水の精	水鳥のダンス1	水鳥のダンス2
構成	板村・音先 ① 4カウント ② 8カウント 	④ 8×1 ⑤ 4カウント(本人相手) 	カノン・シンメトリー ⑥ 8×1 ⑦ 8×1 ⑧ 8×2 	ユニゾン ⑩ 8×1 ⑪ 8×2

⑥授業を終えての生徒の感想

- ・創作ダンスをするのは不安があったがグループのメンバーが助けてくれたので楽しく授業に取り組むことができた。
- ・初対面の人とグループになり作品を仕上げることに不安があったが授業をやっていくうちに一人一人の動きのくせやタイミングが分かってきて楽しくなっていた。
- ・一人一人に役割分担があったのでそれを積極的に果たすことでグループの作品が完成していくことがわかった。
- ・男子一人で心配していたが、グループ内での自分の役割が分かってきてから動けるようになって楽しくなった。
- ・グループ内の一人一人のタイミングを合わせるのが難しかったが作品の意味が分かることで少しずつうまくいった気がした。

⑦この授業を通しての成果

ア 主体的で対話的な授業ができるようにするには、まず生徒の学習状況に応じてどのような課題を与えるかが重要であると考えます。その上で自主的な作品づくりが進んでいけば、班ごとの熱量が上がり生徒同士の人間関係も深くなっていく。教師の一方的な授業展開ではそのような方向性はあまり望めないと実感した。

イ この授業では班ごとに生徒同士の意見交換、作品づくりの工夫、作品の見直し等大変活発に行われた。また、生徒同士の人間関係を深めることができたと感じている。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業が展開できたと考えている。

⑧班の固定の成果

生徒の感想からわかるとおり、班の固定に肯定的な意見が多くみられた。

3 仮説1について

陸上競技（短距離走）の授業において、班の固定の有無による有意な違いは見られなかったが、マット運動、ダンスの授業では、生徒の感想からもわかるように班を固定することへの積極的で肯定的な意見が多くみられた。マット運動のように、技のポイントで「できる」「できない」がはっきりする種目や、ダンスのようにグループで作品を創り上げるような種目では、班を固定した方が効果的な対話を行えることが明らかになった。陸上競技の授業でも、リレーのメンバーを固定するか固定しないかを調査したら、バトンパスという技術のポイントが記録に影響しやすいため、異なった結果になったと考えている。

また、陸上競技の授業では技術指導を教師中心に展開する場面が多く、マット運動・ダンスでは生徒同士の教え合い・学び合いが発生しやすいのでこのような結果になったと思われる。

以上のことから種目による違いはあるが、仮説1は検証されたことになる。

また、陸上競技の授業では技術指導を教師中心に展開する場面が多く、マット運動・ダンスでは生徒同士の教え合い・学び合いが発生しやすいのでこのような結果になったと思われる。

以上のことから種目による違いはあるが、仮説1は検証されたことになる。

4 仮説2について

陸上競技の授業において、自由記述による回答を分類しまとめたものが表4である。自分の記録・タイムの向上や自分自身による記録カードの記入などを通してモチベーションを高めている生徒が5.6%みられた。準備運動そのものや準備運動の声を全員で大きな声で行うことで、モチベーションを高めている生徒が16.4%、先生が評価基準を明確に伝えてくれたことや怪我などの配慮をしてくれたこと、直接的な励ましに意欲が高まった生徒が11.6%と授業や教師も意欲を高める一因となっている。一番モチベーションが高まるのは、友人からの「頑張れ、ラスト」などの応援・激励、「本当に速いね」「とても素敵なフォームだね」等の称賛、「あなたには絶対に負けない」「あなたよりもいい記録を

出す」などの対戦意識や周囲の生徒から「記録が伸びたね」などのポジティブな会話などが挙げられる。友人及び周囲の生徒からの言葉かけは 45.2 %がモチベーションが高まると回答している。

表 5 のモチベーションが高まるタイプを、「自分の記録向上タイプ」、「授業そのものや先生からの言葉かけタイプ」、「友人からの言葉かけタイプ」の 3 つに分けた項目と深い学びの達成状況をクロス集計したところ友人や周囲の生徒からの言葉かけは意欲の高まりにはつながっているため、主体的・対話的で深い学びを達成することには欠かせない要素であることが導くことができた。生徒同士の教え合い・学び合いの場面を多く設定することが深い学びにつながっていくことが明らかになった。

マット運動の授業での生徒の感想において、ア「・・・倒立を教えてくれた友達に感謝したい。」イ「・・・仲間が補助してくれたりして・・・。」ウ「・・・友達と助け合うことでとても楽しい・・・。」エ「・・・グループの子たちとアドバイスし合いながら・・・。」オ「・・・人にコツを教えてもらう・・・コミュニケーションをとることが大事・・・。」、ダンスの授業では、ア「・・・メンバーが助けてくれた・・・。」エ「・・・自分の役割が分かってきてから動けるようになった。」など高い意欲を得るためには、教師側の声掛けよりも生徒同士の声掛けの方が有効であることがわかる。

また、マット運動では、ウ「協働の形成が容易であった。」、ダンスでは「・・・生徒同士の人間関係を深めることができた・・・。」という授業を通しての成果を教師が挙げていることから、生徒同士の教え合い・学び合いは高い意欲の形成に役立つことが明らかにされた。

以上のことから仮説 2 に関しても検証されたことになる。

表 4 問 2：陸上競技の授業でモチベーションが高まったこと。

誰から	人数 (名)	割合 (%)	具体的な行為・発言など
自分	8	5.6	記録・タイムの向上 記録の記入
準備運動	24	16.4	ストレッチ 9 準備運動の声 1 5
先生	17	11.6	評価基準を明らかに 8、 怪我をしないように 4、 頑張り・ラスト 3
友人	61	41.8	応援・激励・称賛 4 1 対戦 1 1 自分よりもいい記録 5 一緒に走ろう 4
周囲の生徒	5	3.4	「記録が伸びたね」などポジティブな会話 5
なし	31	21.2	

表5 モチベーションアップと深い学びの達成状況

誰から	深い学びの観点	①	②	③	④	⑤	合計
自分	人数(名)	7	7	7	5	6	8
	(%)	5.6%	5.3%	5.8%	5.1%	4.7%	
先生 授業	人数(名)	35	36	34	26	36	41
	(%)	27.8%	27.5%	28.3%	26.8%	28.3%	
友人	人数(名)	57	60	54	45	58	66
	(%)	45.2%	45.8%	45%	46.4%	45.7%	
なし	人数(名)	27	28	25	21	27	31
	(%)	21.4%	21.4%	20.8%	21.6%	21.3%	
合計		126	131	120	97	127	

(%は四捨五入での表記とする)

Ⅲ 研究の成果

1 考察

以上のことから仮説1、仮説2とも検証されたことになる。

主体的・対話的で深い学びを達成するための授業改善として、班の固定や生徒同士の対話や声かけは種目による違いはあるが有効な手段であるということは明らかになった。

今後は、球技や武道の授業での調査を行い、各種目に応じた、主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善を目指していく必要がある。

また、深い学びの達成状況とそれを意図的に向上させるための要因を今回の研究では、班の固定と生徒同士の対話という視点で行ったが、その他の要因も考えられるため、自らの授業と周囲の先生方の授業をこれまでと異なった視点でもう一度分析し直す必要性を感じている。

本校の体育の授業はもともとアクティブラーニングを実践しているのので、さらに生徒の能力を向上させるためには「対話的な場面を増やす工夫」や「生徒が授業に対して真摯に取り組んでいるのは何が要因なのか」を多面的に明らかにしていくことが授業改善に有効であろう。

2 これからの課題

これまで本校の体育授業は「指導」と「評価」の一体化を目標に教師が主導し知識や技能を習得することを中心に指導していた。そして、話し合い等の時間より運動量を確保する時間を重視する傾向があり、体育授業は私語をせず静かな雰囲気の中で実践されてきた。しかし、今回の生徒が考えたり、話合ったりする授業で主体的・対話的で深い学びをにつながる事が明確になり、「する」という側面だけでなく「みる」「支える」「知る」の視点に関してもクローズアップされた。

また、深い学びの達成状況とそれを意図的に向上させるための要因を今回の研究では、班の固定と生徒同士の対話という視点で行ったが、その他の要因も考えられるため、自らの授業と周囲の先生方の授業をこれまでと異なった視点でもう一度分析し直す必要性を感じている。

本校の体育の授業はもともとアクティブラーニングを実践しているのので、さらに生徒の能力を向上させるためには「対話的な場面を増やす工夫」や「生徒が授業に対して真摯に取り組んでいるのは何が要因なのか」を多面的に明らかにしていくことが授業改善に有効であろう。

今後は「する」を重視した指導から「みる」「支える」「知る」といった多様な関わり方を視野に入れ、何をどのように学ぶかを各校生徒の状況に応じて指導を実践することが必要になってくると思われる。そして「豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力」を育成することを再確認し、新しい指導観に立った授業改善の取組を推進していきたい。

【参考文献】

- ・佐藤 豊編著 明治図書 平成30年版学習指導要領改訂のポイント
- ・鈴木 直樹 編著 創文企画
子どもの未来を創造する体育の「主体的・対話的で深い学び」
- ・岡野 昇 青木 眞 三重大学教育学部研究紀要 第69巻 教育科学(2018)
259-266頁 体育における「主体的・対話的で深い学び」に関する考察
- ・「主体的・対話的で深い学びの推進」プロジェクト 新潟県立教育センター
「主体的・対話的で深い学び実践ハンドブック」
- ・森田 哲史（埼玉大学教育学部附属小学校） 体育科教育学研究 35(1):27-32.2019
「小学校における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育授業」